



2024 年

10 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 10 月 6 日 : ルカ福音書 12 : 8 - 12 .

『 宣認基督 』

・ 10 月 13 日 : ルカ福音書 13 : 22 - 30 .

『 狭き戸口 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

身から出た錯、自業自得、因果応報、等々、私たちの人生には避けがたい因果律が存在し、これに縛られて繰り返し悩まされて生きているという“錯覚”に屢々陥ることがあります。「あなたの信仰があなたを救った」のとは真逆のケースです。西洋人なら“O h m y G o d !”と叫びたくなるどころです。

けれども、“O h m y G o d !”と責められるほうの神(G o d)ご自身の見解はというと、さあ、どうでしょう？ こうした事例がイエスの口から弟子たちに語られている面白い場面です。

例えば、人前で公然と“自分はイエス・キリストの同志である”と告白する者がいたとすると、キリストも神と天使たちの前で、その忠実なる僕が“同志”であることを認める、逆に人々の面前で、“自分はイエスの同志ではない”と否定する者がいたとすると、キリストも、その者とは無関係であると証言する、というものです。前者は神の助けを得ますが、後者は残念ながら孤立無援です。

イエス・キリストは弟子たちになぜ、こんな譬えを用いたのでしょうか？ 実はこの直前にイエスはファリサイ派の家に招かれて、同席している律法学者も交えて(食事の席で?)議論を交わし、彼らの偽善や不信仰を激しく非難していたのです。そして彼らがイエスを否定するよりも前に、既に彼ら自身が主なる神とは断絶状態にあることを誰よりもよく知る“神の子”自らが、神に背を向けたままの彼らの“孤立無援”を宣告していたのです。この激しい応酬の喧騒を引き摺ったまま、家を出ると、イエスは外にひしめく群衆を尻目に、近くで待機していた弟子たちに向かって語った内容の一部に、この“告白”の重要さが語られていたのです。

これは、イエスなき後、彼らが官憲の前で身分を証明する際に、申し開きではなく堂々と告白すべきことであり、その時には必ず聖霊によるバックアップが得られることが約束されます。もはやファリサイ人でも律法学者でもなくイエスの弟子たちこそが主なる神と直結する忠実な僕、働き人として仕えることになりそうです。この移行は、時代の推移と共に異邦人キリスト者の出現をも後押しすることになりそうです。

《 狭き戸口 》

そして人々は、東から西から、また北から南から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。

(ルカ福音書 13 : 29 - 30)

さて、最終的に神の国の食卓につく者たちとは誰でしょう。その人々は次の14章の譬えに登場するような人々です。彼らは自分では人を招くことも、逆に人から招かれることもなく、罪の誘惑からも遮断された人達です。では、そんな人達がどうして招かれることになるのかというと、本来、招かれる予定だった人々が、なぜか招待を固辞し続けたからでした。さかのぼればアブラハムやイサクやヤコブ、義しい預言者たちのように、たとえ素行に問題が生じていたとしても、神と向き合うことを忌避しなかった先祖たちは神の国に入れられました。彼らは自らの落ち度をさらけ出しつつ、悔い改めることも忘れなかった人達でした。また、けっして地位の高さを誇れる聖人君子ではなく、むしろ神から愛想をつかされそうになったことも幾度かありましたが、それでも神を信じることを放棄しなかったばかりか、何とか神のみ旨を知ろうと努力した人達でした。こうして彼らが主なる神を素直に受け入れている限り、神も彼らのことをけっして無視することはありませんでした。それから数百年後に世に現れた神キリストを通して天からの最後のメッセージが発せられる段階となって、今日の譬えが語られます。

狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸を叩き、「ご主人様、開けてください」といっても、「お前たちがどこの者か知らない」という答えが返ってくるだけである。その時、あなたがたは、「ご一緒に食べたり飲んだりしましたし、私たちの大通りで教えを受けたのです」と言い出すだろう。しかし主人は、「お前たちがどこの者か知らない。不正を働く者ども、皆私から離れよ」と言うだろう。

(ルカ福音書 13:24-27)

こうして、最終的に神の国に入る者とそうでないものが選別される仕組みが明らかになります。

なるほど、複数のファリサイ人がイエスを家に招いて食事を共にしたり、弟子たちの背後にはいつも群衆が通りに居合わせて、イエスのメッセージに耳を傾けていたりしたのはたしかです。ただそうした人々が必ずしも神の独り子の招きに応えたわけでも何でもなかったという真実がここに暴露されているのです。たしかに、イエスの譬えの中には、聴衆が今すぐにでも神のみ旨を果たすためのヒントが数多く語られていたのです。そしてその実行こそが、その人の神の国への第一歩となるはずであったことをイエスは教えていたのです。